



「P-1グランプリ」。それはリフォーム実績年間2万件以上を誇るパナソニックエイジフリーの社員が、「 Panasonicとしての人間力」「アランニング力」「プレゼン力」を競い合う、年に1度の社内コンテストだ。2001年から始まり、毎年開催されている。今回はパナソニックエイジフリー近畿リフォーム課の麻生恵理さんが手がけた事例を紹介する。

Sさん（80歳代・男性）は妻と息子、愛犬の3人と1匹暮らす。4年前、自宅で入浴中に脳内出血を発症し右まひが残った。要介護度は2。だが、まひの程度は軽く、杖だけで1人で外出は可能だ。握力の低下もなかった。室内の移動も伝い歩きや手すりを利用しながら自立していた。

唯一、妻の見守りが必要だったのが、入浴。病院からも、浴槽への出入りは「健側の左から」という指示が出ていたが、自宅の浴室は構造上どうしても妻の介助が必要だったのだ。Sさんの要望は浴室の段差をなくし、妻の見守りなしでゆっくり入浴したい」とのこと。一方、妻からは古くなった浴室と洗面室の窓枠を取り替えるといふニーズがあった。次に家屋の状況をアセスメント。まず、段差は洗面室と浴室の間に約100mm。そして浴槽のまたぎ段差も16cmの高低差があった。右側に浴槽があることでも右まひのSさんは入りにくい位置だ。

Sさんが1人で安全に入浴できるようにするために、まず大きな壁となつたのが11

ニットバスだ。シャワーチェアの利用や、Sさんの身長を考慮してゆったり入浴してもらうためにはサイズを大きくすることが望ましい。そこで天井点検口から構造調査を実施。造作間仕切りを全て撤去してすらすことでサイズアップができると判断した。さらに、Sさんに対しては一連の入浴動作についてご自身の力でできる動作を確認し、何度もシミュレーションを繰り返した。そして、Sさんの握力の強さという特性から、浴槽に入浴時に手すりを使えば右側から安全にまたぐことができると判断した。こうしてユニットバスを大きくすることで、広々としたスペースも確保できた。

施工から2カ月後にモニタリングで訪問すると、Sさんは新しい浴室で手すりを使いこなし、スマートな入浴動作を披露。妻の見守りも必要なくなり、これまで週3回に我慢していた入浴も毎日できるようになつたと喜びの声を聞くことができた。妻も夫の自立を笑顔で喜んでいた。そして小声でこう囁いた。「あまりに快適だから、息子まで入浴回数が増えたんです。でもね：私は洗濯物を増えて困るのよね。」

麻生さんは「一般論を踏まえつつ、1人ひとりに残されている個別の能力や家屋状況を丁寧にアセスメントし、慎重にシミュレーションし検討した結果、安全で合理的な改修をすることができる」と振り返った。荒川大治リノベーション東日本統括部長は「お客様のリハビリの状況と動作検証を何度も丁寧に実施してきたエイジフリーらしい良い事例」と評価した。



『増えた洗濯もの』——1人で安心して快適な入浴を！



改修後 改修前

QOLリフォームよりすぐり

7

広告



くらしの中で「できる」ことを増やし、そして、次に「やりたい」ことに向かっていただきたい、そんな思いをシンボルマークにしました。パナソニックの介護用品で「心身が前向きに、その先に歩みだす」。私らしくいきいきとしたくらしを実現できる社会を創ることそれが私たちの存在意義です。



パナソニック エイジフリー
エイジフリーショップ
お問い合わせ先：営業企画部 06-6908-8122

